

群 衆

第69号 平成24年12月21日発行

編集・発行 秋田県水産振興センター
 ☎ 010-0531
 秋田県男鹿市船川港台島字鶴ノ崎8-4
 TEL 0185-27-3003 FAX 0185-27-3004

東日本大震災から得ること



写真 春風に揺れる乾ワカメ

秋田県水産振興センター
 所長 中村 彰男

未曾有の被害をもたらした東日本大震災。水産業の復興は、想像していた以上に早いペースで図られている地域があり、農業や林業の試験研究機関の関係者から驚きの声が聞かれるということを耳にしました。

発災から一ヶ月が過ぎた平成23年4月下旬に、岩手県久慈地方に漁港漁場復旧・復興の支援のため現地を訪れたこ

とがありますが、破壊された漁港施設や漁港用地内の共同利用施設、そして漁船の流失を目の当たりにし、大津波の巨大なエネルギーの脅威を感じた一方で、漁港がいつから復旧工事に入るか気がかりで見に来た漁業者の遠目で私たちを見ている視線が気になりました。

「自分が漁業をやめたら何も残らない、ここにいる必要がない。漁業を続けるだけだ。」とテレビ放送で聞いた三陸地方の漁業者の声。当たり前であるが漁業者は海の音を聞き、海を見ていないと気が休まりません。生きるために、いつまた津波が襲来するかわからない海辺で生活することを選ぶ多くの方々がいてくれて、水産業が継続される現実に、国民は感謝しなければなりません。

被災県の隣県である秋田県は、人的、物的の両面から水産業の復旧・復興支援を現在も継続しております。水産振興センターでは平成23年度、アユ種苗生産施設が壊滅した岩手県には、秋から冬に栽培漁業施設をフル稼働し、アユ種苗の増産に取り組み、岩手県内水面漁連に有償で中間育成用のアユ稚魚100万尾を提供。また、宮城県へは宮城県水産技術総合センターに、海藻種糸巻付器を使ったワカメ種糸350本を無償提供しています。

これに応えるかのように、平成24年の5月には、宮城県気仙沼市唐桑にある宮城県漁協唐桑支所の畠山運営委員長から、ワカメ種糸に対する礼状とボイル塩蔵ワカメ15kgが当センターに送られてきました。礼状には、「養殖いかだや漁船・漁具そして大事な家族や自宅を失い、避難所生活を余儀なくされ、多くの漁業者が絶望の淵に立たされ、呆然とした日々が続いていました。しかしながら、地域での助け合いや多くの皆様のご声援に後押しされ、4月には漁業者も漁業再開の決意を固め……沖合いのガレキの中から、ワカメのついた養殖の桁が見つかり……これでワカメの種が確保できる、漁業者の喜びには言い表せないものがありました。その上、秋田県農林水産技術センター様のご支援をいただき、陸上での種苗確保も行われることとなり、養殖施設の復旧も急ピッチで進みました。」と綴られています。

一方、岩手県に供給されたアユ種苗は、岩手県北部のアユ種苗中間育成事業者の手によって放流用稚アユに育成され、河川に放流されました。種苗放流後、釣り人からは秋田産由来のアユに絶賛の声が聞こえてきたとの話を、岩手県農林水産部技監や岩手県からのアユ釣り人が多い角館漁協の門脇組合長からそれぞれ伺いました。

養殖業を含む海面漁業生産額は、宮城県は本県の約20倍、そして岩手県は約10倍であり、内湾に恵まれたリアス式海岸、そして栄養塩豊富な親潮が流れ込み、沖合には世界三大漁場といわれる漁場があります。それゆえ、足元にも及ばない本県の漁業生産額ではありますが、震災対策として始まったワカメ増産支援、アユ種苗中間育成に係る養殖業が、新たな水産業展開のきっかけになればと願っています。

●トピックス(資源部)●

漁業調査指導船 千秋丸 完成

昨年から建造を進めてきた漁業調査指導船 千秋丸が完成し、11月に業務を開始しました。これまで千秋丸(187トン)、第二千秋丸(18トン)の2隻で行ってきた調査を効率良く1隻で行うこととして中型船としたほか、漁網監視装置や各種観測装置など最新の機器を備えました。また、新たな漁場の調査に向け、はえ縄漁業等も操業できます。さらに、教育機関の実習等への対応も可能な体制を整え、水産試験研究のみならず、本県の水産業全般にわたる振興のために活用しています。

主要目

全長	33.84m
総トン数	99トン
主機関	1,030KW (1,400PS)
航海速力	12ノット
最大定員	24名(船員8名、調査員4名、研修員12名)

主要設備

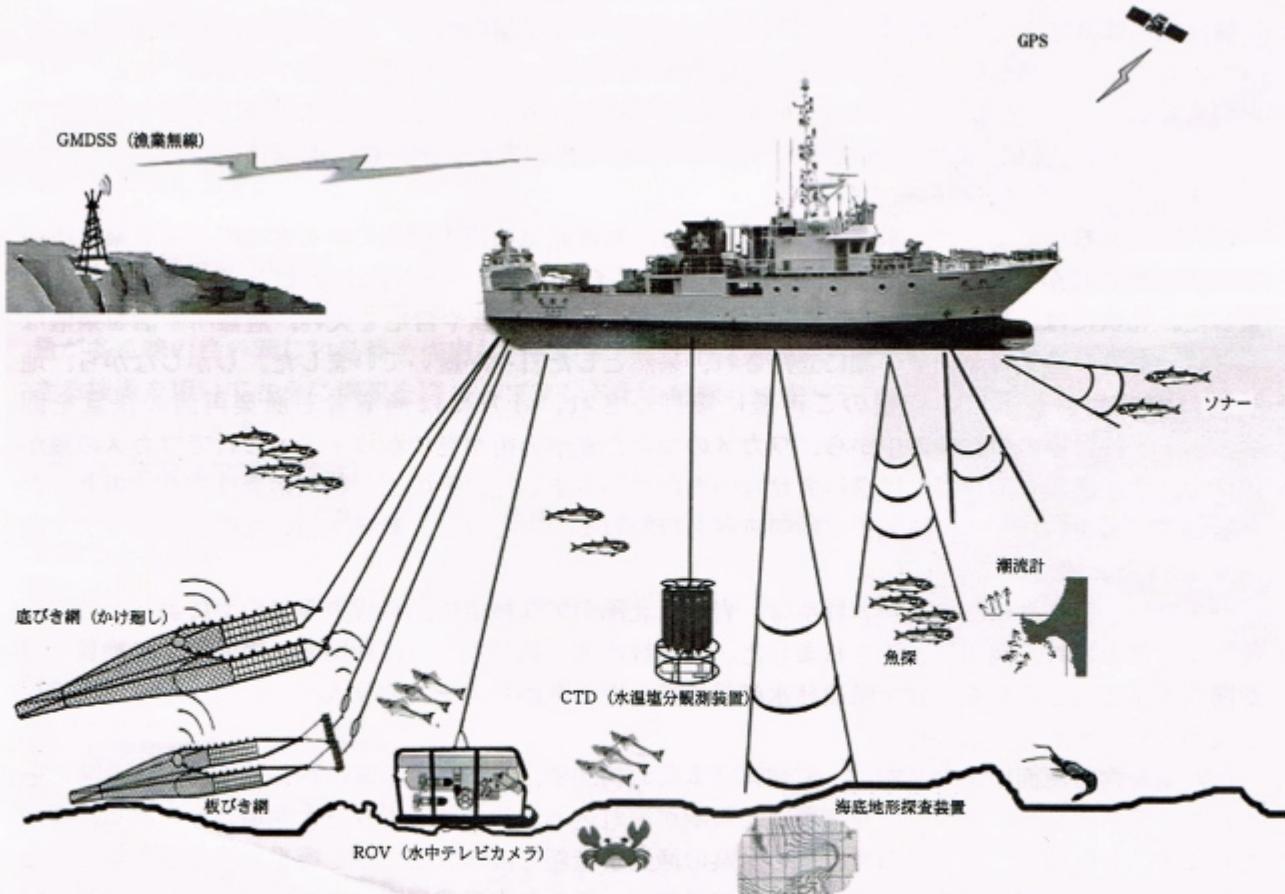
遠隔操縦水中テレビ、水質自動観測装置、海底地形探査装置、潮流観測装置、採泥装置、海洋データ処理システム、開口式板びき網、かけ回し式底びき網、漁網監視装置、はえ縄漁具、釣り漁具等

主な業務

海洋環境調査(沖合、沿岸)、ハタハタ資源調査、底魚資源調査(タラ・カレイ・エビ・カニ類等)、新魚種資源調査(トラフグ、クロマグロ等)、その他の調査(大型クラゲ、サメ対策等)



写真 室蘭市の造船所から船川港に回港した千秋丸



◇ 調査船による調査の概要 ◇

●普及活動報告(総務企画室) ●

活け締めの技術研修について

平成23年度秋田県青年・女性漁業者交流大会で水産庁の上田勝彦氏による「あたま一つ上の魚価を目指して「活け締めの技術について①活け越し②即殺③放血④神経抜き⑤予冷⑥保存」という、実演を交えた講演がありました。これに高い関心を示した県漁協北浦総括支所の青年部は、この技術を習得するための研修・実習を行いました。

平成24年10月23日午後、初めに水産振興センターにて活け締めの方法を紹介するビデオ（上田氏が出演）を視聴しました。続いて、参加者9人が実際にヒラメの活け締め作業を行い、各工程を習得しました。その後スズキとマダイの活け締めを試み、スズキは成功しましたが、マダイは神経抜きがうまくできなかったことから、頭部や尾部を解体して神経抜きの箇所を観察しました。

今回の研修・実習で、ヒラメとスズキの技術習得はできましたが、マダイについては課題を残しました。今後、さらにこの技術の習得に努め、これを活用することにより魚価の向上につながることに期待しています。



写真1 研修会

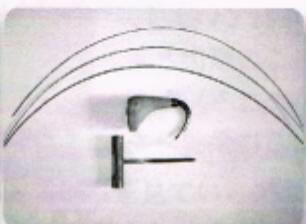


写真2 使用する道具



写真3 手順②即殺



写真4 手順④神経抜き

●研究成果報告(増殖部) ●

天然アユ資源の増大を目指して

アユは、内水面の漁業・遊漁・観光にとって非常に重要な資源ですが、秋田県では、その資源状況は種苗放流よりも天然アユの遡上量に大きく左右されることがわかっています。遡上量が変動する原因はいろいろありますが、アユが産卵する場所が十分にあるかどうかということも大きな要因と考えられます。

そこで、センターでは産卵場の保護や、人工産卵場の造成が必要な場合に参考となる基礎データを集めることを目的として、米代川本支流を対象に産卵場を調査しています。

その結果、産卵は9～10月に、水深が20cm、流速が60cm/秒で、川底の石の大きさが2～4cmの瀬で行われることが多く、ここでは生きている卵の割合が90%以上と高いことが明らかになりました。また、このような瀬は中流域に多く見られますが、新しく産卵場となったり、産卵されなくなったりと、年によって産卵場として利用される瀬が変わっていました。これらを比較したところ、産卵されなくなった瀬は、産卵が確認された瀬に比べて、川底が堅く、石の表面への付着物が多いことがわかりました。

産卵場が年によって変わる原因については、産卵期前と産卵期中の気象条件(降雨量や日照時間)や河川流量、瀬の形状(中州にできたものか、蛇行部にできたものか)等との関連も考えられるところから、今後はこれらを含めた解析を行っていきたいと思います。



写真 産卵場となった瀬
(枠内は産卵場で確認されたアユ)

●研究紹介(増殖部) ●

藻場の維持・増大と磯根資源の活用をめざして

魚価の低迷、就業者の高齢化と減少など、水産業が厳しい状況にある中、設備投資や操業経費が少なく、若手から高齢の漁業者まで幅広く取り組むことができる磯根漁業、特に夏場の潜水漁業は、本県の沿岸漁業を支える重要な漁業と言えます。そこで、水産振興センターでは平成24年度から5年間で、「藻場と磯根資源の維持・増大及び活用に関する技術開発」として次の課題に取り組むこととしました。

【藻場の復元と造成】

アワビは、主に沿岸の浅瀬で餌となる海藻の豊富な「藻場」に生息していますが、近年、県南部を中心に藻場の海藻が減り、長期間にわたって海藻が生えない「磯焼け」現象が見られています。そのため、磯焼けの実態を明らかにするとともに、この原因と考えられるバフンウニやコシダカガニガラ（だま、したなみ）などの植食生物の増殖を抑えたり、海藻が育ちやすいように栄養分を添加したりする技術を開発します。

【イワガキの増殖】

全国トップクラスの漁獲量を誇るイワガキですが、漁獲量に比べて再生産能力が低く県南部沿岸を主体に資源は減少しています。雑海藻やフジツボなどのじゃまな生物が先に付くと稚貝が付きにくくなることや、付着した稚貝がレイシガイ（にがだま、にしがい）などの天敵に食べられてしまうことがその原因と考えられます。そこで、これらを除去する岩盤清掃や、天敵を駆除する技術を開発します。

【ワカメ養殖技術の開発】

県内で養殖による生産量が増加しているワカメについては、収量が多く味の良い新しい品種を作出し、より簡単な方法で養殖できる技術を用いてさらに増産を図り、ブランド化を目指します。

【アワビ増養殖技術の開発】

藻場の回復や造成などにより漁場を整備して天然アワビの増殖を図るとともに、効果的な種苗放流技術を検討します。また、増産した養殖ワカメなどを活用したアワビ養殖技術の開発に取り組みます。



写真1 夏の風物詩 潜水作業



写真2 磯焼け (海藻のない
白い部分が目立つ)



写真3 岩盤清掃
(イワガキ付着面の確保)



写真4 養殖ワカメ

編集後記 「ハタハタを好きな人、手を上げてください！」見学に訪れる子供たちに質問すると、少なくとも半分以上、時にはほとんどの子供たちが、元気に手を上げてくれます。ブリコのねばねばが苦手とか、白子はちょっと、という子はいても、まったく食べられないという子はないようです。魚離れという言葉をよく聞きますが、秋田の漁師さん、まだまだ頑張りがいはありそうです。